東方官衙から木簡

平城宮跡で出土

かけ算の「九九」役人は中国式で勉強？

奈良市の平城宮跡（特別史跡、8世紀）にある官庁街跡「東方官衙」から、かけ算の「九九」の記された木簡が出土した。ほかにも「天皇」の文字が書かれた木簡なども見つかった。奈良文化財研究所が3日、発表した。

木簡（長さ16・3センチ、幅1・5センチ、厚さ2ミリ）は「□九廿七　二九十八　一九如九」（□は欠損）など九の段のかけ算が記されていた。

答えが一けたの時に前に「如」を書くのは、中国の数学書「孫子算経」（3～5世紀ごろ）に出てくる九九と同じ書き方で、孫子算経は奈良時代の律令で数学の教科書に定められていた。役人が中国の数学書を参考に九九を練習したとみられる。

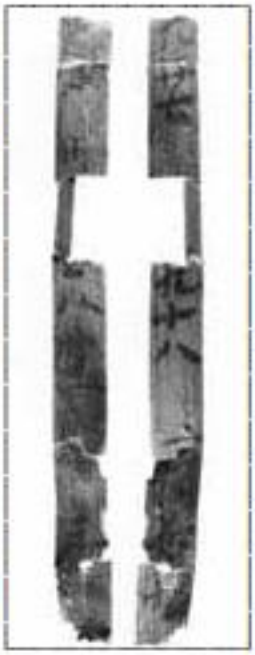
九九が登場する日本最古の書物は、学童の教科書「口遊」（10世紀）だが、「如」は書かれていない。中国数学史に詳しい東京大学の川原秀城教授は「中国語の読みでは、『如』を入れた方が四文字でそろって語呂がいい。奈良時代は中国から伝わったまま練習していたのが、平安時代に『如』だけ落ちたのだろう」と推測する。

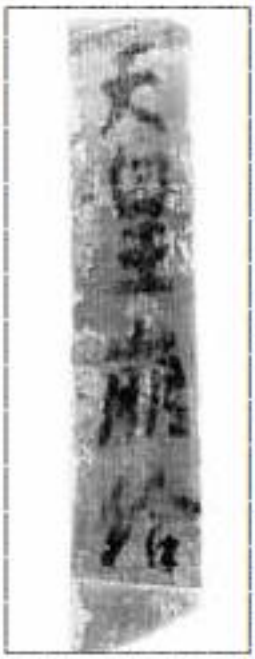
称徳天皇（718～770）を指すとみられる「天皇」の文字が書かれた木簡（長さ6・3センチ、幅1・3センチ、厚さ2ミリ）も出土した。平城京跡ではこれまで、皇位を後継者に譲った後の聖武太上天皇を指すとみられる「大上天皇」と書かれた木簡が出土しているが、天皇その人を指す木簡の出土は今回が初めてという。

表に「天皇崩給」、裏に「年八月」などと書かれていることから、宝亀元（770）年8月に亡くなった称徳天皇を指すとみられるが、用途は不明という。

ほかに、藤原仲麻呂の乱（764年）で活躍した武将道嶋嶋足や、門を守る役所「衛門府」の次官、粟田朝臣鷹守ら、奈良時代の正史「続日本紀」に登場する人名が書かれた木簡も見つかった。

木簡はいずれも、宮内を警護する役所「衛府」のごみ捨て場とみられる穴から見つかった。すでに出土した木簡の記述から、宝亀2（771）年、同3（772）年ごろの木簡群とみられるという。





上九九の記された木簡。右下に「一九如九」と書かれている
下「天皇崩給」と書かれた木簡＝いずれも奈良文化財研究所提供

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。